

## 「風土」 和辻哲郎

この本では、まず寒さを例に挙げて風土の理論が説明されている。人は寒さを感じることによって、はじめて寒気を見出すことができるという。というのも、寒気が実際にあったとしても寒さを感じなければ、寒気の実在を見出すことはできず、存在していないと捉えることもできるからである。このように、寒気の実在は自己が感じようとする志向性を根源的な原因となっている。人はこの志向することによってあらゆるものを認識できるのであるから、人は志向性を持っていることを特徴としている。自らを知ろうとして内省するときにも、その志向の対象になるものしか知ることは出来ない。志向の対象にならなかった自己に関する情報は、存在しない情報になる。認識しないものは存在しないに等しいとすると、志向を特徴とする自己があって初めてあらゆるものの存在があるということである。

そして、人は寒さを感じたとき、すでに寒さの中にいる自己を見出すことになる。ここで見出す、寒さの中にいる自己は、寒さと関係を形作った自己である。人は何かを感じ、何かとの関係を形作った時、はじめて何かの存在を見出すことができる。したがって、人は何かに向かって関係を起こす志向性を持つことによって、はじめて何かの存在とそれと関係している自己を見出している。これは感覚だけではなく、花を見たときに美しいと感じれば、花と自己が関係を持つだけでなく、花の美しさと関係している自己を見出している。自己を認識するときに、景観、気候、土地などの風土的な現象によって見出される自己と関係を作ったあらゆるものを自己として捉えることができる。人は風土によってそこに自己を見出しているという。

ところで、家のつくりは気候や土地によって異なっている。その地域の気候や土地に適した建築様式が生まれることから、気候や土地といった風土的な現象によって見出された自己が家のつくり表現されていることになる。日本語には「うち」「そと」という家の中と外を区別する表現があると指摘されている。「うち」では「うちのひと」という表現もあり、個人の区別はなくなる。このような日本人の意識が家のつくりにも表現されていると和辻は主張する。ここで、いくつかの例を挙げている。日本の家は襖や障子で仕切られているだけで、居間と個人の部屋はほとんど区切られていないことから、家の内部で隔てなき結合が見られること。そして、家の周りの垣根や塀、戸閉まりによって「うち」と「そと」を明確に区別し、ここには強い「へだて」が表現されていることである。このような家の内部においては情愛が発達し、家の外部においては、非社会的な心情を持つに至ったという。

とはいえ、近所づきあいの視点からみると、この和辻の主張はどうなのか、と感じる。風土が書かれた今から70年ほど前では、一次産業や二次産業がメインであり、今よりも自営業を営む人は多く、働く場所も自分の家が近場であったのではないか。その場合、そこでの商売の相手は住んでいる地域が同じ人々である。この時、近所の人々と仲良くすることは収益に直結することから、近所づきあいは差し迫った問題であった。今でも地方的な経済で見られるが、近所づきあいの一つの方法として、近所の八百屋を利用し、その八百屋を営んで

いる人にも自分の店に来てもらうようにすることもあった。こうして、地域の人々のコミュニケーションは活発となり、地域的な共同体が生まれ、この共同体は強い力を持って機能していたのだ。近所づきあいは重要な関心事であり、活発に行われていたはずである。和辻は家の外において非社会的ではなかったことを主張するが、それほど非社会的と言えないのではないか。家の外に対して強い「へだて」があったという主張は疑わしく思える。

また、現代では和辻が家の外への強い「へだて」を表すという塀や垣根が減少へ向かっていくのではないかと思う。新築の家には塀や垣根が見受けられないものが多いからだ。その一方で社交的行動といえる近所づきあいは減少していつている。自分にとって役に立つかどうかや、他人からの関与を拒むという個人主義が広まっていることが近所づきあいの減少の原因と考えられているが、家の構造と人々の意識は矛盾したものとなっている。現代の日本人の精神構造が家に表現されていないとすれば、家の構造から人々の精神構造を探ることの、今日的な有用性は低いのではないか。

## 「月と六ペンス」 モーム

この小説ではストリックランドという男の壮絶な人生が「私」という作家によって語られていく。ストリックランドはロンドンで株式仲介人として働き、家庭を築いたところから、一転してすべてを投げ出し、一人でパリに移り住む。妻は夫に女ができたのだと疑ったが、すべては絵を描くためだった。その後、タヒチへと向かい、病に苦しめられる中、最後の力を振り絞りって壁一面に絵を描き、一生を終える。死後になって初めて、彼の作品はその高い芸術性において素晴らしい評価を与えられることになった。

こうして人生の概要を見るだけでも、この人生を送るには大変な苦勞が必然的に予想されるだろう。しかしながら、この小説にはストリックランドの内面的な葛藤が全く描かれていない。むしろ、精神的な苦勞など全く無いかのようである。周りからの目や批判、その他身に降りかかる様々な障害を寄せ付けず、超人的な人物として描かれている。この点において、過酷な人生を生き、絵に情熱を捧げた芸術家という面白い人物設定にも関わらず、物語の中ではありふれている、紋切り型の超人的人物になってしまった。これによって障害が生まれているのではないか。ストリックランドという芸術家への共感を、読者に呼び起こし難くなってしまったことだ。小説中で、ストリックランドが偉大であることを繰り返し強調されるが、そこで引き合いに出されるのは、作品の素晴らしさといった作品に関わるものである。人物性に関わる偉大さが挙げられることはない。芸術家の人物の偉大さを作品によって評価するのか、あるいはその人物性によって評価するのか。これは個人に任せられるところではあるが、ストリックランドが偉大であるという主張は、読者がその人物性に共感を得られないことで、素直に頷ける主張ではなくなっているのではないか。

とはいえ、小説の冒頭で主人公である語り手の「私」は、ストリックランド一家の輪郭は

ぼやけてつかみどころがないと言っており、あらかじめ人物描写は断片的になることの一解を読者に求めているかのようである。であるなら、ストリックランドという芸術家を偉大だと思わせる仕組みは別のところに見出さなくてはならない。

この作品は登場人物に多面性を持たせ、あからさまに重層的に描いている。ここからは、人間は多様な側面から成り立つという著者モームの人間観がうかがい知れる。ストリックランドは普通の平凡な夫として描かれるが、家族を捨ててパリへ行ってからは、絵に対する情熱を胸に秘めた自由気ままな人物になる。あたかも自分を縛り付けていたものから解放されるかの如くその人物像は一変する。その妻であるストリックランド夫人に関しては、善良な妻として登場し、そこから世俗的で愚かさが際立った女性になる。この夫人の場合、良い人物として描かれたのは冒頭部のみで、それ以降は可哀想なほど悪く描かれ、俗物的な印象を濃くしていく。この二つの人物の描き方は対称的である。世俗的な社会から逃れ、本来あるべき自分を得たかのように充実した人生を送っているストリックランド。自らの世間体を保つために懸命に努力するストリックランド夫人。この二人のうち、この小説がどちらを高く評価しているのかは明らかだろう。

この小説に登場する人物は断片的な情報しか提示されないし、この小説は読者に現実味を感じさせる小説であろう。「ストリックランド一家こそ、イギリス中流階級の平均家族そのものではないか。」(p46 4行目) という記述もあるように、この小説が書かれた当時のイギリス社会を描こうとする著者の意図が感じられる。

もしそうだとするなら、ストックランド夫人は当時のイギリス社会に生きる人々の愚かな部分を象徴させた人物ともいえる。社会が発展するにつれ幸福な人生を送れるようになるはずだ、と考えていた当時の人々にとって、自分たちが思い描いていた社会はこのような社会ではないと思う人々が想定される。思うような幸せを社会に見出せないそうした人々にとって、ストリックランドのような生き方はとても魅力的に映る。つまり、どこかここではない場所に幸福な生き方があるのではないかと考え始めた人々の不満に答えるようにして登場したのがストックランドということになる。彼こそは、この社会から逃れたいとどこかで思いながらも、家族を養うためや何らかの理由があって、現実には実行不可能と考える人々の憧れを体現した人物といえる。人々が憧れを持つならば、ストックランドという生き方に、価値を認めていることもわかる。

ストックランドは過酷な人生を生き抜いたから偉大であるのではなくて、心のどこかで憧れを抱きながらも、現実にはできないような生き方を実践したからこそ偉大であると言えるのだろう。ゆえに、精神的葛藤など描かず、自己実現に伴う社会的批判をあっさりとして隠してしまうように描くことでも、人物性に評価が生まれ、この芸術家が偉大であるとの主張は説得力を持ちえたのではないだろうか。

個人的な意見を言えば、現代の読者に訴えるには、内面を巧みに描いていくことは必要だと思う。最近では、「自己実現」に対する批判的言説を数多く目にする。読者の大多数が覚めた目で、このような「自己実現」的な生き方を見る可能性が十分にあるからだ。

## 参考文献

サマセット・モーム『月と六ペンス』土屋政雄訳、光文社古典新約文庫、2008年

## 「若きウェルテルの悩み」 ゲーテ

この小説についてざっくり説明する。主な登場人物は主人公のウェルテル、ロッテ、アルベルトの三人である。ロッテとアルベルトは結ばれており、そこへロッテに惹かれたウェルテルが入り込んでいくという話である。

ウェルテルとアルベルトが討論をする場面がある。自殺をする人に対する見解で二人の意見は食い違った。ウェルテルは自殺した人にはそれ相応の原因があり、自殺を愚かな行為と判断しない。病によって命を失うことを例に挙げ、病で死ぬことは愚かであると判断できないように、自殺することも愚かな行為ではないという。一方で、アルベルトはどんな事情があろうとも、自殺は愚かな行為であると主張する。そして、分別のある人ならどんな状況下にあろうと、自殺という行為を選択しないはずだとする。これに対し、どれだけ分別があろうとも、耐えることのできる苦しみには限度があり、その限界を超えてしまうのなら理性は役に立たなくなり、人は破滅する、とウェルテルは言い返す。結局二人の議論は、互いに自らの主張を譲らないまま終わりを迎える。

この場面を読んで思い出したのは、マックス・ウェーバーがその著書『職業としての政治』で論じた「責任倫理家」と「心情倫理家」の考え方だった。「責任倫理家」は自分の行動の結果を自分にあるとするが、「心情倫理家」は自分の行動の結果の責任を世間や環境といった自分の外部に責任があるとして、自分で責任を負わない。ウェルテルとアルベルトの議論で問題となったのは他者の行動であり、少しずれたところがある。しかし、行動の責任を行動の主体に見出すか、あるいは主体の外部に見出すのか、という点においては共通している。

アルベルトの場合、自殺は分別のある人ならしないはずだとして、自殺の責任を行動の主体に見出している。ウェルテルの場合は、病気の例や自殺した人の境遇に目を向けていることから、責任を行動主体の外部に見出している。

二人の議論の焦点である、自殺が愚かであるか、そうでないかは一概には言えないが、他者の自殺に対する姿勢として望ましい在り方はあるのではないか。これは当たり前のことだが、行動主体の外部に責任を置くことによって、自殺した人の環境に注目して自殺の原因を分析していくことにつながる。そうすれば、同じような悲劇が起らないように社会を、または身の回りの環境を改善していくことができるだろう。一方で、自殺の行動の責任を行動の主体に見出すことは、多くの自殺の要因を自己責任として片づけてしまい、環境の改善にはつながっていない。また、本人ではどうすることもできない、運による差も無視することになる。個々人は

先天的な性質や育つ環境によって多くの差があり、これらは本人ではどうしようもできない。ウェルテルとアルベルトの議論で挙げた分別の程度に関しても、先天的な性質や育つ環境の影響を強く受けるものだ。よって、他者の自殺に対する姿勢としては、ウェルテルのように自殺した人の外部に自殺の責任を見出した方がよいのではないかと思う。